

素晴らしい須走を知りたい!

「すばらしい隊」養成講座 第4回講座概要

第2部: 体験 富士山を知る／中級編 「富士山噴火の考古学」

■日時

令和2年11月14日(土) 9時~12時

■場所

須走コミュニティセンター

■講師

○杉山 浩平

東京大学大学院 総合文化研究科 グローバル地域研究機構 地中海地域研究部門 特任研究員

■講義概要

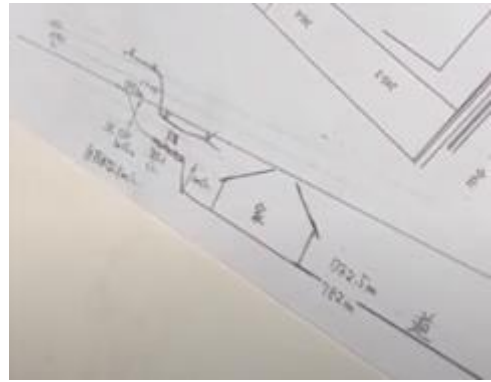
1.

ーここは1年ちょっと前は駐車場で碎石が敷いてあった。車が停まっている所は、段があり、小申さんの方に向かいほぼ平坦だった。さらに数年前までは道路に近い所に家が2軒くらいあった。平坦だったので、調査をさせてもらうにはいいので許可を頂いてレーダー探査をさせてもらった。場所的には道路より南側。今までの我々の調査は空地がある所をやらせていただく方針なので、なかなか道路の北側のところができない。松葉寿しさんの隣の駐車場をレーダー探査したら、「ここは車が埋まっている」と言われた。レーダーを見ても何も見えなかった。小申さんの隣の防火水槽で炭が出ている、大米屋さんで鉄鍋が出ているので本通りは噴火前もあの辺にあり、道路に面したところに建物があったと思う。



2.

ー当時の地形はどんなだったか? 発掘調査をした後に、道路を作る関係で何度かショベルカーが入ったので、下の火山灰までどの位の高さがあるか調べさせてもらった。この辺でも白い火山灰まで2.5m位ある。一番下の白い火山灰まで2.5mで、プラス数十センチ堆積しているので3m位ある。現在の、道路からグ〜ッと上がってくる感じの地形は当時もこのような感じだったのではないかと思う。復元の絵を描いてみたが、道と同じ高さの所に家があった。麦が出たという畑は一段高いところ。そこからさらにこの段差でもう一段高くなっている。このようなもともとの地形だったのではないか。そこに火山灰が降ったので、その地形を覆うようにして現在のこういう斜面、支所や事務所側の方が少し高くして下がっていくような地形になった。オリジナルの地形もほぼそれ。絵図や写真を見ると、道の所に水が流れていた。今は蓋がされているが、水は低い所に流れるのでそういう地形なのかと思う。



3.

ーコンクリートの斜めの擁壁があるところが高い所の段に上がっていく途中だと思う。畑が見つかったのはこのお宅のこの辺。おそらくこの段差がもともとあり、その下に小さな畑があり、そこで食料、雑穀類を作っていた。木苺があったが、この段差の上に植わっていて、畑を覆うような感じで伸びていたのではないかと。それが富士山からの白い火山灰の熱で燃えてしまった。ポンペイでは畑や果樹園が出て来た。今でもナポリ周辺はぶどうの名産地だが、ぶ



うがたくさん出ている。ポンペイの遺跡では、掘った遺跡から燃えたぶどうの木が出て来た。ポンペイの場合は多くが炭としてではなく、穴として出てくる。位置が確定出来るので、そこに今のぶどうを植える。そのぶどうで「ポンペイのローマ時代のワインだ」と商売をする。1週間くらい前のナポリの方の新聞で、ローマ時代のぶどうの収穫を大々的にやったと記事になっていた。木苺がどれだけ当時の須走の人にとって重要なものかは分からないが、木苺があるということは当時の人たちは木苺を見ているし、子供達も食べている。売り方として、「江戸時代の須走木苺」として商売ができなくもない。そういうのも遺跡を活用するという意味では重要だと思う。観光客の人と、なぜ木苺なのかという話も出ると思う。実は須走に木苺があり、遺跡で見つかっている。そういう歴史があり、今これを売り出しているという話ができる。木苺はジャムにするとか…、参考までにお話させてもらった。

4.

ーここは建物があったところ。私たちが掘ったところ、このトレンチの部分。側溝の蓋があり、この部分辺りを中心囲掘田。ここで柱が二本、建物の角が見えた。当然ながら今の土地の区画と昔の土地の区画は違っている可能性があるため、もう少し広いかもしれない、柱の並びも変わってくる。置物はこの辺り。本通りが昔と同じ位置にあると思うので、同じような方向に走っていると思うので、そっち側に間口があるはずだが奥行きの方が長い。文書を見ると間口の方が長くて横が狭い、それは共通している。そうするとこちら側に玄関があった。当時の家は間隔があるので、こっから入れなくもないがそこがよく分からない所。菊池先生の講演で古代の官道の道路の幅 7m が変わらないというお話があったが、大正



から昭和の米山館さんの絵葉書を見ると水路があり、水路の後ろに石塔があり米山館さんがある。他の絵葉書を見ると、米山館さんの前でたくさんの富士講の方たちの集合写真があった。そういうのを撮れるとすると、結構石塔から米山館の建物まで数メートルの距離がないといけないはずだが、現状で止まれの辺りまで建物がある。レーダーを行えた範囲がそこまでであって、その向こうまでつながっている可能性はある。建物の構造が昔とは変わっているかもしれない。須走が噴火前から噴火後、その後江戸時代にも何回か大火があったという話を聞いている。同じ位置に建物を作り直していると思うがその変遷の中で、大正から昭和の初期はこういう位置に建てられたという変遷も見えてくる。今回の発掘では江戸時代の終わりから明治時代位の陶磁器が数点出て来た。表土に近い所の火山灰の層は少し乱れている。人々が掘り返した状況だとそのようにガタガタになる。宝永後の何回かの大火や家の作り直しの時に多少表面を削ったりしているのかと思う。そこもちゃんと分かる範囲は調べていった方が、トータルで須走の歴史が見えてくる可能性があると思った。



5.

—この絵はがきは1900年より前のものだろうと思う。水路が流れている。今私たちがいるのは左側の水路の脇。この絵はがきは明治時代だと思うが、屋根が板葺きなのか、茅葺きなのか、瓦葺きなのかというのが参考になる。遺跡を掘った時に、萱の焼けたのが大量に出てきたので、茅葺きの家だろうと思う。家の下基礎が石垣を作っているというのも面白い。掘った時は、このような基礎は見つからなかった。元々ここは傾斜地なので、石垣を作って高くして、もしくは削って平らにする。こういう石垣の石はそこらへんに落ちていることが多い。痕跡があるかどうかを見ていき、角ばって大きい石が見つければ、こういう所の石垣を再利用していることが分かる。



—今回調査をして、ここが分からないということ。①神社に鳥居があったなら、大きな柱穴があったはず。レーダーで見た範囲では未確認。そもそも鳥居はないと思っていたが、菊池先生の地図の中で鳥居があるということが分かった。鳥居は木なので、木の鳥居を埋めるための大きな柱穴を掘る。それは火山灰をよけたとしても残っている。場合によっては中の柱が腐って残っているかもしれない。レーダーをさせてもらい、穴の位置が分かるだけでも須走の噴火前の神社の様子はこうだったと分かるかもしれない。②現在の本通りの北側の様相が解らない。消防団の水槽にはあるのは分かった。レーダーで何軒かは見えた。もしレーダー観測をさせてもらえるところがあったら教えてほしい。そうすると町の家々の建並みの分布が見えてくる可能性がある。③須走の町の東端がどこまでなのか、解らない。本通りがずれているかもしれない？須走下本町の端、信号の所に先ほどの広重の絵図でここに大きな門があり、税



金を取ったところ。それは噴火後であり、今でも継承されていると思う。そのあたりをレーダー観測させてもらったが、家があるようには見えない。そこの方に聞くと 3m 位下に畑の畝があったらしい。菊池先生は本通りは普通はまっすぐ作ると思う、とおっしゃっていた。曲がった理由は色々あると思う。須走の町を復興する時に、神社は鳥居がこんもりとしていて分かったと思うので、そこを基準に「山当て」と言って、当時この辺は何もない砂漠状態の所からこの道を復元していく。向こうの山を見ながら、ここはうちの前位と復元していったと思う。神社に近い所は鳥居もあり分かるが、離れば離れるほどその誤差は大きくなっているのではないか。もしかすると須走の町はもう少し手前で曲がっているかもしれないが、分からない。いずれ何らかの方法で調査できないかと思っている。復興にあたり、人々がどのように町を再建したのか、元の町と同じように作ったのか、どこが違うのかということが分かると思う。



6. 質疑応答など

ーQ. レーダー探査について

A. レーダー探査をすることにより、何かあるかどうかは分かる。レーダーで分かる範囲は、何かあるかないか、その大きさと深さまでは推定することができる。

ーQ. 先ほどのお話で、噴火の際に軽石が落ちてきて屋根に乗っかり軒先に落ちる、ということだったが、屋根を突き破ることはないのか？

A. ここは火口から 10 kmなので火山弾があるはず。火山弾は重いし突き破る可能性がある。軽石は基本的には上に上がり切ったものが落ちてくるので突き破ることはないはず。軽石も土が真っ赤になるほどの何百度という熱を持っている。頭大の大きさの軽石だが、表面はそんなに熱くなく、石の中に熱を持っていて、落ちてパカッと割れた時にそこから発火するらしい。富士山がいつ噴火するか分からないと言われている。おそらく富士山の噴火は関東地震と連動しているが、200年周期で起こるのが分かっている。関東大震災から100年近い、後半に入ると大きい地震を連発する。それに連動して富士山が噴火する可能性がある。

ー福島県の大内宿の建物は藁葺きで、街道筋に 20 軒位両サイドに並んでいる。街道側は敷地幅が狭く、奥行きが深い。それに合わせて建物も幅 3 間、奥行き 6 間位の大きな建物が建っている。入口は街道側ではなく、街道側から入り込んだところ。建物の形式で言うと平入。先ほど見せていただいた須走の昔の写真と似ている。

ーQ. 当時、宝永の噴火で家も砂に埋まってしまった、上からは火山灰も降ってくるなかで人々はどこに避難して、生活再建のために待っていたのか？

A. 文書を見る限り、死者はいないが馬がみんな死んだから復興が大変だったという話。馬は置き去

りにされた。馬がいなくて逃げたということは、徒歩で逃げた。ここは 3m と言われているが、大仁田の方の集落も 1m 以上あるので、2 週間の噴火…分からない。

—Q. 当時馬は財産なのに、馬を置いていくということはそんなにひどくなるとは思っていなかった？

A. 火山灰は風向きによって限定されてくる。ここから小山町、山北、神奈川方面に向かっては結構降っているが、裾野の方に行くとき少ない。火山灰が降る範囲は、須走は扇子の要のところに近いので狭い。秦野のほうは広がっていく。ここはピンポイントなので、そこをずれば噴火そのもの人体への影響は少なかったと思う。御殿場方面、それより西側へ逃げたと思う。山中湖の方も火山灰がない。そこをうまく逃げて避難したのかと思う。

—Q. 昔道路を作る際、掘った時に昔の町並みが出てきたりしないのか？ 吉田の御師町は最初水路が真ん中を通っていて、階段状になっている町だったのが馬車鉄道を通すために平らにして水路を脇に通したという話を聞いたことがあるので、そういう変遷が須走にもあったのか？

A. 20 年ちょっと前、下水道工事をするときにかなり掘った。こういうことが分かっていたら気を付けていたが…。下水道管を入れる時に何かが出て来たという話は聞いていない。本通りの電線の地中化工事の着手も始まり、いろんな埋設物を全部掘り返した後始めるはず。次の工事のタイミングでは先生の知見を活かしたうえで、合わせて調査もやっていかざるを得ないと思った。道路部分だと掘っても家も出てこないと思うが、2~3m 掘れば宝永の硬化面(踏み固めた固い表面)が出るし、その上でも馬車鉄道が通る前の地面、通った後の地面が検出されると思う。須走の町の歴史、変遷を考えれば非常に重要なので、何らかの記録は残しておいてもらえるといい。須走は完全に砂だけで 2~3m 埋まっただけで細菌がいらない。細菌が悪さをしないので検出された柱のように生木の状態でも残る。非常に稀有な例。指宿や群馬の例は火山灰で埋まっているが、土壌も入り込み細菌が色んなものを分解してしまっている。地下水もあり、須走は他の所より残りがいい。

—Q. 建物があったところを丁寧に掘れば生活用品やお宝が埋まっている可能性がある？

A. 生活用具は埋まっていると思う。須走の生活を示すもの、富士講に関するものが大量に出てくると思う。それは今までどこにもない。それが出てきたら富士山の回りの色んな富士講の関連施設と比較ができ、須走の特徴を明らかにできる。ここにしかないものが埋まっている可能性があるという意味で非常に重要。

—今日のお話を伺い、宝の宝庫がたくさんあると感じた。今まで「どちらにお住まい？」と聞かれても、須走と言っても分からないから御殿場と答えていた。小山町は文化に対して関心度が高いので考古学を活かすまちづくり、観光資源にするというのが大きな望みになった。

杉山氏：発掘の調査の成果を論文にして発表する。面積は狭かったが、富士山で埋まっている、残りは良い、色んなものが期待できるという点で、海外の考古学の雑誌に出してみようと思っている。海外の人にもインパクトはあると思う。

